

あいぶらんど通信

2016年
7月 11日 (月)
あいぶらんど運動
推進委員会発行
No. 49



牛渡さんファミリー

あいぶらんど商品を中心に現場取材し、組合員の声で文章にして広める活動をあいぶらんど運動推進委員会で行っています。特に震災後生産現場を訪れる取材の走行距離は 8,800 キロにもなりました。あいぶらんど通信縮刷版にギュッと情報が詰まっていますが、取材を初めて 4 年。今年度は、震災後訪れた生産現場にもう一度行ってみたいとスタートしました。あいコブの生産者との「顔の見える関係」をこれからも築いていこうと思います。



あれから 4 年！！タンポポ村魂！！



牛渡社長へ取材の様子

今では、組合員と共同開発した「もぐもぐミニウイナー開発」ですっかり有名になったタンポポ村さんですが、震災直後のご苦労は一言では語り尽くせないほどの困難を乗り越えています。2012 年 4 月にあいぶらんど取材で訪れた際にお聞きした内容を中心に、取材から 4 年経過したタンポポ村さんの現状を伺ってきました。改めて感じる「タンポポ村魂」。このタンポポ村魂と言われる訳を紐解きたい思いで、「あれから 4 年」放射能測定の実況です。

<震災時を振り返る社長の言葉>

青空を覗かせる梅雨の晴れ間を感じる 6 月 21 日。仙台市から東部道路、常磐道へ乗り南相馬市にあるタンポポ村さんへ向かうと、以前訪れた時の半分の時間であったという間に着き、この地がより近くに感じました。

事務所兼工場は、福島第 1 原発からわずか 33 キロメートルの所にあります。牛渡社長から始めに、改めて放射能のダメージや現在の状況を伺うことが出来ました。「放射能のダメージは今も続いている」「風評被害は一度商品を扱わなくなった店はなかなか取り引きしないもの」とお話を始めます。東京方面にスモークサーモンの取引があったそうですが、震災後思うように商売が回らなくなったといいます。そこで価格を安くすることで、よそとの差別化を計るので、今もなお赤字が続いている状況だと伺いました。

震災直後、半年は政府も混乱していたので、自分たちの商品は、測らないで出す事は出来ない。水も商品もまずは測って安心しよう！判った上で出すという思いで、自分たちで測定しようと取り組んだとのこと。まず、放射線モニタ、シンチレーション式サーベメーター・シンチレーションスペクトロメーターを購入することにしました。当時 600 万もする測定器も買えないし、購入しようとしてもいつになるかわからない。理屈が分かれば、作れるのではないかと勉強されたとの事です。

驚いたのは、放射能を遮断するための箱を鉛のブロックと銅板を使って、自分たちで手作りされたことです。別室にある実物の測定器を拝見させて頂き、この取り組みこそが「タンポポ村魂」と言われる訳だと実感しました。添加物を入れず、安全・安心なそして、美味しいウイナー・ハムを作るために、努力を続けて下さっているタンポポ村だからこそ、実現出来たことなのかもしれません。



牛渡正典マネージャー

<測り続けると語るマネージャー>

タンポポ村さんを訪問するのは今回で 2 回目でした。震災後いち早く、放射能測定を実施したことは、私たち組合員にとってもありがたいことでしたが、当時の状況を考えると並大抵なことではなかったのだろうと想像していました。原発から近く、地帯で多くの方が避難している中、製品を作り続けられるかの判断、そして誰もがどうすればいいか困惑しているところで、自分たちで安全を確かめようと放射能測定の機械を作ったことを伺って頭が下がる思いでした。マネージャーの正典さんが部品を集めて自作で用意した機会は現在も使われていました。どう見ても素人が作ったものではない機械を前に、専門的な知識を持つ方なのかと伺うと、全くそうではなかったというのには驚きでした。部品の一部は海外からも取り寄せ、その道に精通している知人からも教わりながら今日までずっと測定を続けてこられました。製品以外にも、近くで採れた竹の子やきのこ、自家栽培の野菜なども測っているそうで傾向もつかめているようでした。震災直後の杉の葉はサンプルとして取っており、今でも高い値を示していました。



放射能測定器

<ずっと測り続けます>

正典さんは私たちと同年代で、小さいお子さんがいらっしゃるようです。同じ子を持つ親ですからとても聞きづらい事でしたが、ここで生活していくことに心配はないですか？と伺いました。正典さんの口からは、『はい』と力強い言葉が返ってきました。父親として、会社のマネージャーとして大切な人たちが口に入れるものをしっかり測って安心を得ていることと、この 5 年の実績が自信につながっているなあと感じました。そして最後に『僕らはずっと測り続けます』とおっしゃった言葉に感激しました。食べる人がわかるからこそ、安心できるものを届けたい、自信をもって供給したいという気持ちの表れと思い、私たちもその気持ちに少しでも応えたいと思ってタンポポ村さんを後にしました。

